

第一次世界大戦勃発と革新主義の 平和推進者たち

——国際女性平和運動におけるアメリカの女性たちの
リーダーシップ——

Progressive Peacemakers at the Outbreak of WWI:
American Women's Leadership in the International
Women's Peace Movement

一政（野村）史織

要 旨

本稿は、第一次世界大戦勃発時に、国際的な女性平和運動の中でアメリカの社会改革運動家の女性たちがどのようにリーダーシップをとるに至ったかを検討するものである。既存の多くの研究では、女性参政権運動や社会改革運動で活動していた女性たちの平和運動への参入が強調されている。しかし、初の国際女性平和組織である ICWPP の成立（1915）に至る過程で、アメリカの社会改革運動家のグループが平和運動を主導していった理由については充分検討されていない。本稿は、運動内で女性参政権の直接的な要求が避けられ、平和のための革新主義的な方針が採られた理由として、1) 活動した欧米の女性たちが革新主義的な改革思想や、中立国アメリカへの期待を共有していたこと、2) 移民などを支援してきたアメリカの社会改革運動家たちは、その活動経験を通じて国際理解や国際政治への関心を高め、国際政治に関わる活動の妥当性を擁護できたため、3) 平和運動と明確に結びついて女性参政権運動を進めることに、参政権運動内で意見の対立があったこと、を明らかにした。

キーワード

平和運動, アメリカ, 第一次世界大戦, 女性, 革新主義

はじめに

19世紀前半から後半のアメリカ合衆国（以下、アメリカ）では、拡大する中産階級を中心に、ヴィクトリアニズムと呼ばれる道德規範が広がっていた。この道德規範は、とりわけ女性たちに厳しい性や道德の規範を課して、女性のジェンダー役割を家庭という私的領域内に強固に結びつけ制限するものであった¹⁾。しかし、女性たちが当然持っていると考えられた「信心深さ、純潔、従順さ、家庭的であることという四つの美德」²⁾は、「男性および世界を浄化する」³⁾という主張につながり、女性たちは家庭だけでなく社会も守り導くべきであり、また、それが可能であるという考えが生まれてきた。すなわち、以前は家庭という私的領域の範囲内でのみ女性たちに与えられたジェンダー役割が、19世紀後半には公的領域まで拡大されるようになっていったのである。19世紀半ばから拡大してきた女子教育の影響もあり、世紀末には都市の貧困地区などで生活環境の改善、語学教育や職業訓練などの社会福祉を支える女性たちや、職業として看護や教育などを担う女性たちが出現してきた⁴⁾。さらに、これらの活動や職業を通して女性が公的領域に進出する中で、女性参政権運動も生まれてきた。19世紀末から1920年の女性参政権成立までの「第一波フェミニズム運動」の特質を、栗原は「女性による改革運動」であり、「男性とは異なる女性の本質性（男性とは異なる女性の道德的優位性）」という考えに基づいて進化したと指摘している⁵⁾。こうして、19世紀末からアメリカが第一次世界大戦に参戦する1917年ごろにかけてのアメリカでは、革新主義（Progressivism）と呼ばれた全米に広がる社会改革運動が展開された。そのため、この時代は「革新主義時代（Progressive Era）」と呼ばれている⁶⁾。

第一次世界大戦中に平和運動に関わったアメリカの女性たちは、こうした社会改革運動で活動した経験がある者、看護、教育、福祉などの社会改

革につながるような分野の専門職に従事した経験がある者、あるいは、参政権運動で活躍した者が多かった。例えば、著名な社会運動家であり、女性参政権運動にも協力していたジェーン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) は、1914年に結成された初の全米女性平和組織である女性平和党 (Women's Peace Party, 以下, WPP) の議長となり⁷⁾、さらに、1915年に成立した国際的な女性平和組織である「恒久平和のための女性国際委員会 (International Committee of Women for Peace, 以下 ICWPP)」⁸⁾、及び、その後継として第一次世界大戦後の1919年に成立した「婦人国際平和自由連盟 (Women's International League for Peace and Freedom, 以下, WILPF)」の初代会長を務めた⁸⁾。また、社会改革運動に参加した経験があり、社会科学分野での高名な大学教授であったエミリー・グリーン・ボルチ (Emily Greene Balch, 1867-1961) も、WILPFの第二代会長を務めている⁹⁾。

ICWPP及びWILPFの設立は、第一次世界大戦中に欧米の女性たちの間に広まった平和運動の一つの成果であった。1915年に成立したICWPP、及び、第一次世界大戦終結直後に開かれたICWPPの会議で、ICWPPが改称されて成立したWILPFは、欧米の女性たちの国境を越える初の国際的な平和組織として大変重要な組織であり、現在でも、アジア、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカなど世界各地にも支部をもち、その活動を続けている。第一次世界大戦中、ICWPPやWILPFは、欧米各国の政府に積極的に働きかけて平和運動を牽引し、戦間期には国際連盟に協力して多くの提言を行った¹⁰⁾。

ICWPP (WILPF) の初期の活動や組織の運営に大きな役割を果たしたのは、当時の会長職についたのが、アダムズやボルチであったことからわかるように、アメリカの女性たちであった¹¹⁾。既存の多くの研究では、社会改革運動または女性参政権運動、あるいはその両方で活動していた女性たちが平和運動へと参入してきたという指摘がなされており¹²⁾、この運動

に参加したさまざまなグループをまとめて、フェミニズムの視点から描かれることも多い。しかしながら、ICWPPの成立に至る過程で、女性参政権運動のあり方をめぐって対立や分裂が起こり、アダムズを中心として社会改革運動のグループが主導するような形で国際的な女性平和運動が展開したことについて¹³⁾は、日本ではまだ十分整理されているとは言えない。そこで、本稿では、社会改革運動で活動していたアメリカの女性たちに特に注目し、彼女たち間でどのようなネットワークが形成され、ICWPP成立までの国際的な女性平和運動の中で、彼女たちがどのようにリーダーシップをとっていったのかを検討する。

第1節 社会改革運動と平和運動のネットワーク

セトルメント運動は、主に都市部の貧困地区に設置したセトルメントハウスに住み込みや訪問等を行い、慈善、教育、保健、福祉活動などを展開する社会改革運動の一つである。アメリカでの代表的な社会改革運動の一つであったセトルメント運動の中心人物であったアダムズは、19世紀後半のイギリスで世界最初のセトルメントハウスとして設立されたトインビーホールを視察し、シカゴにハルハウスを設立した。ハルハウスは、アメリカにおけるセトルメント運動の最初の拠点の一つとなり、1911年に全米セトルメント連合（National Federation of Settlement）の会長となったアダムズは、各地で展開されたセトルメント運動のまとめ役として活躍した¹⁴⁾。

アダムズは、セトルメントに集まるソーシャルワーカーのグループの中で、平和運動の機運が高まっていく様子を、後年回想して次のように書いている。

ソーシャルワーカーたちの小さなグループが、ニューヨークのヘンリー・ストリート・セトルメントで一連の会議の第一回目を開催し、長年にわたって深刻な貧困の解消に力を注いできた人々の、戦争への反

応を表明しようとしたのは、1914年の初秋のことであった。私たちは、人間の生命を最も謙虚でわずかな形でも育もうとする努力は国境を越えるものであり、また、その奉仕に長年を費やしてきた人々は、社会的価値のあるものは、幅広い世論やすべての文明国の協力によってしか得られないと確信していた¹⁵⁾。

上述のアダムズの記述の中にある「ニューヨークのヘンリー・ストリート・セツルメント (Henry Street Settlement)」は、ニューヨークのロウアーイーストサイドに1893年にリリアン・ワルド (Lilian Wald, 1867-1940) とメアリー・ブリュースター (Mary Brewster, n.d.-1895) という二人の女性看護師が、訪問看護サービス所を設置したことが始まりであり、「地域、州、そして、国家レベルで社会改革の中心として機能」した、当時の代表的なセツルメントであった¹⁶⁾。上記の文章で、アダムズは、医療や福祉などを提供し、セツルメント等で活動してきた人々について「長年にわたって深刻な貧困の解消に力を注いできた人々」と表現している。そして、「人間の生命を最も謙虚でわずかな形でも育もうとする努力」に注力し、「その奉仕に長年を費やしてきた人々」が、平和を求める運動を開始したことを強調している¹⁷⁾。

のちに国際的な女性平和運動で重要な役割を果たすボルチも、アダムズらの働きかけに応じて、ボストンのセツルメントであるデニソンハウスの設立、運営に関わった。デニソンハウスは、カレッジセツルメント協会 (College Settlements Association) がはじめてボストンに設立したもので、レジデント (residents) は女性のみというセツルメントであった。ボルチは、この初代館長を引き受け、また、アダムズもビジター (visitor, 住み込みではないメンバー) としてその活動に関わった¹⁸⁾。さらに、ハルハウスでアダムズに協力したセツルメント運動の指導者たち——たとえば、アリス・ハ

ミルトン (Alice Hamilton, 1869-1970) やフローレンス・ケリー (Florence Kelley, 1859-1932) ——は、のちに ICWPP 及び WILPF でも活動した¹⁹⁾。以上からも、セツルメントという社会改革運動の現場が、女性たちによる平和運動の拠点、少なくとも平和運動を生み出した女性たちのネットワークに重なる場であったと言えよう。

第2節 セツルメントでの移民との関わりと国際理解

セツルメント運動などの社会改革運動に参入したのは、主に中産階級の白人女性たちだったが、彼女たちは活動の中で労働者や移民たち——その多くが移民労働者たち——と接することも多かった²⁰⁾。アダムズは、自分たちが移民と関わって働いていたこと、また、自分たちの平和構築への意識は、移民たちの状況への理解から生じていたと記している。例えば、彼女の「ヘンリー・ストリート・セツルメント」での集会についての記述を見ると、移民との関わりが明示されている。

ヘンリー・ストリート・セツルメントに集まったこのグループのメンバーの多くは、アメリカの都市の中でも国際的な地区で生活していた。私たちは皆、さまざまな国からの移民の中での長年の経験から、すべての民族 (peoples) の間で友好的で協力的な関係がますます可能になってきていると確信していた。戦争は、強圧によってその目的を達成しようとするものであり、場合によっては、最終的に人類という家族全体の善良な協力過程を中断させるだけでなく、致命的に逆行させる、と私たちは信じていた。

ヨーロッパでの戦争は、すでに移民の隣人たちを分断し始めていたが、助けを必要としている子供の親が、イタリア人だから連合国側なのか、それともダルマチア人だから中央同盟国側なのかを問うことな

ど、私たちには想像もつかなかった。そんな質問は、バルカン戦争の時に、親がマケドニア人なのかモンテネグロ人なのかを心配そうに尋ねるようなもので、ありえないものだった。もちろん、一時はその区別が多くの隣人にとって最も重要なことではあったのだが²¹⁾。

アダムズの文章から、社会改革運動に関わっていた人々は、移民たちと接する機会があったことが明らかである。また、活動家たちは、社会改革運動において移民たちの出自に関係なく働きかけや奉仕をしていたことが明示されている。さらに注目すべきは、アダムズや彼女の周りの社会運動家たちの平和構築や国際協調へのアプローチが、アメリカ社会における彼らと移民たちとの関係、あるいは、彼らによる移民たちの観察から導き出されたことを示唆している点である。

私たちは、戦争が残酷で野蛮であることだけでなく、戦争が意味する人間関係の悪化にも憤慨した。自由な心と寛大な優しさの両方が人間関係においてまさに必要とされている時に、私たちは「抑圧される知」と「妨げられる善意」について抗議したのである。平和主義者は正義の主張に無関心であるとの非難が後になされたことを考えると、私たちがこのように早くから、正義こそがこの時代の最善の政治・社会活動の基調となっているという事実を強調していたことは、興味深いことであった。また、私たちが、人と人、あるいは国と国の間の正義は、理解と交流によってのみ達成されるものだとも信じていたこと、また、現代文明の中で唯一役に立つ、よく練り上げた正義の感覚は、戦争の嵐の中では保証され得ないだろうと信じていたことも興味深い点であった²²⁾。

この文章では、アダムズら社会改革運動を担った人々が、多様な背景を持つ人々に対して、理解や交流を深めてきたことが示されている。そして、それらの経験から、「人と人、あるいは国と国間の正義は、理解と交流によってのみ達成される」²³⁾との認識が導き出されたことが、肯定的に描かれている。

別の例として、ボルチを見てみると、ボルチが関わったデニソンハウスでは、「各エスニックグループの文化教育なども促進する活動」を展開しただけでなく、「組合活動やその理念などを移民や労働者に紹介する活動や、労働運動をしている人々とのつながり」も存在し、このセトルメントを拠点に、ポストン組合 (Boston Trade Union) やそのほかいくつかの女性の組合も結成されていた²⁴⁾。このような環境のもと、ボルチは、移民労働者が多く居住する地区にあったデニソンハウスで、移民や労働者向けの教育・社会活動を行った。さらに、教鞭をとっていたウェルズリーカレッジ (Wellesley College, 19世紀後半に設立された女子大学の一つ) の学生たちを引率して、労働者や移民が多く居住する地区でフィールドワークなども行った。このような中で、ボルチは、移民やその出身地域への理解を深め、移民と米国社会との関係を考察していくことになった²⁵⁾。

ボルチは、社会科学 (特に、新興の分野であった社会学) への興味や知識、そして、実地での経験から、当時まだ新しかった移民研究のパイオニアになっていった。彼女は、1905-1906年のサバティカル期間中に、オーストリア=ハンガリーを中心にスラヴ諸国で研究調査を実施し、帰国してからはアメリカのスラヴ系移民コミュニティの調査も行って、スラヴ系移民についてのアメリカで最も重要かつ最初の研究書の一つである『我々のスラヴの仲間の市民たち (Our Slavic Fellow Citizens)』²⁶⁾を1910年に出版した²⁷⁾。ボルチの社会活動や社会科学的研究は、当時の革新主義的な思想の影響を受けていた。しかし、移民地区や移民送り出し国への実地調査を通じて、彼女

は、国家、民族、共同体などへの独自の理論を発展させていった。彼女の移民研究は、「移民やナショナリズムについての当時の知的傾向に大きな影響を与えた」²⁸⁾と評価されている²⁹⁾。以上のように、革新主義がその根底にある社会改革運動や社会科学研究で、女性たちが成し得た社会活動や実体験に基づく意見の発信は、彼女たちが平和を訴えるきっかけにもなり、また、彼女たちの平和運動により説得力を持たせたと考えられる。

第3節 WPPの形成と女性参政権運動のネットワーク

上述したように、社会改革運動で活動していた女性たちは、第一次世界大戦が勃発すると平和運動への関心を深めていった。1915年1月、ワシントンD.C.で大規模な女性たちの集会が開催され、アダムズを議長としてWPPが結成された³⁰⁾。WPPの結成には、ヨーロッパの女性たちのアダムズらへの働きかけがあった。まず、ハンガリーの女性ジャーナリストであり、女性参政権運動家のロジカ・シュヴィマー (Rosika Schwimmer, 1877-1948)³¹⁾が、国際会議の設置や非軍事的な制裁、中立国による調停を求めた嘆願書を携えて1914年夏に渡米してきた。彼女は、アダムズや全米女性参政権協会 (National American Woman Suffrage Association) 会長のキャリー・C・キャット (Carrie Chapman Catt, 1859-1947) に、ヨーロッパでの戦争終結と平和構築への協力を訴え、全米の女性たちの平和組織の設立を要請した。同時期に全米講演中だったイギリスの女性参政権運動家エメリン・ペシック＝ローレンス (Emmeline Pethick-Lawrence, 1867-1954) も、アダムズらに働きかけていた。

アダムズは、この二人について、「合理的な講和条件を議論すること、及び、国際的な問題を解決する方法としての反戦運動という目的を支持する少なくとも小さなグループを組織するまで、彼女たちはアメリカを離れようとはしなかった」³²⁾と書いており、ヨーロッパの女性たちが持ち込んだ

中立国アメリカによる調停という案が、アダムズらのWPP形成や組織の方針に大きな影響を与えたことが示唆されている。1914年秋にはベシク＝ローレンスのシカゴでの講演会后に、アダムズを議長とする「シカゴ平和団体緊急連合（Chicago Emergency Federation of Peace Forces）」が形成された。この組織の会員は男女で構成されていたが、アメリカが主導する中立的な調停という考えを組織的に支持していった³³⁾。さらに、アダムズとキャットが中心となって、全国の女性組織や各分野で活躍している女性たちに対し、平和を求める集会への参加が呼び掛けられた。そして、シュヴィマーやベシク＝ローレンスの「各都市での一連の会議の締めくくりとして」1915年1月10日から2日間にわたってワシントンで「3000人の大集会」が開かれ、その「成果」としてWPPが結成された、とアダムズは記している³⁴⁾。

さて、形成された全米初の女性平和団体の議長が、キャットでなくアダムズになったのには訳があった。戦争が、社会改革運動や女性参政権運動でそれまでに達成された進歩や成果を失わせてしまうという理由で、二つの運動で活動してきた女性たち（もちろん両方の運動に関わっていた女性たちもいた）は、平和運動へと参入してきた³⁵⁾。しかし、フォスターは、女性参政権運動の活動家たちの一部は、平和運動に対して慎重な態度であったと述べている。たとえば、キャットは女性参政権運動の推進の方により関心を持っており、女性参政権について世論を混乱させないように、「いかなる女性の平和組織とも距離を置く」べきだと考えていた³⁶⁾。こうして、WPPの結成は、女性参政権運動と社会改革運動の合流という側面を持っていたにもかかわらず、WPPの綱領の中では女性参政権については控えめに主張された。以下のWPPの綱領を見れば、それが明らかである。

1. 早期の平和実現のために中立国会議を直ちに召集すること。

2. 軍備の制限と兵器製造の国有化。
3. 我々自身の国の軍国主義化に対する組織的反対。
4. 平和の理想を実現するための青少年教育。
5. 外交政策の民主的な統制。
6. 女性への参政権拡大によって政府のヒューマニズムを向上させること。
7. 「力の均衡」にとって代わるべきは「国際協調」であること。
8. 戦争を法に置き換えるため、世界の漸進的な再編成に向けて行動を起こすこと。
9. 陸海軍による対抗ではなく、経済的圧力や通商関係の停止に置き換えること。
10. 戦争の経済的原因を取り除くこと。
11. 国際平和を推進するために、適切な予算を有する男女で構成される委員会をわが国の政府が任命すること³⁷⁾。

以上のWPPの綱領で明確にされたのは、平和実現のために女性の政治参加が必要であるという主張であったことがわかる。つまり、女性の権利がすべての主張の土台として要求されたわけではなく、むしろ女性の政治参加を含め、平和のために社会や政治が改革されるべきだという視点の方が特徴的であったのである。いずれにせよ、WPPの綱領で示された主張は、のちにウィルソンの十四か条で訴えられたものと共通する項目もあって、第一次世界大戦後には広く世論に知られるような考えであったが、「当時は新しく、驚くべきようなものだった」³⁸⁾とアダムズは書いている。WPPの綱領は、革新主義的な社会改革の思想が根底にあるという点で当時の新しい主張であったのだが、同時に、栗原が指摘するように、この時期の女性参政権運動自体が改革運動の枠内で行われていた³⁹⁾あらわれでもある。

また、キャットの平和運動への慎重な態度でわかるように、この時点ですでに、女性参政権運動ではなく、社会改革運動のグループが前面に立って平和運動が進められていたとも言える。

WPPの綱領でもう一つ特徴的なのは、国際平和と国際協調のために中立国アメリカが果たすべき役割を明確に示している点である。これは、WPPの綱領が、中立国であるアメリカに調停を求めるシュヴィマーやベシク＝ローレンスなど、ヨーロッパの女性たちから発せられた主張を取り入れていたからである。さらに、アメリカに中立会議の設置を促す案は、カナダ出身でアメリカのウィスコンシン大学で教員をしていたウエルズ (Julia Grace Wales, 1881-1957) の案にも基づいていた⁴⁰⁾。アダムズは、当案がWPPの方針にも反映されたとはっきり述べている⁴¹⁾。当時既にウィスコンシン州議会では、米国などの中立国政府による継続的な仲裁を求めるというウエルズの案を、ウィルソンに上程し、「合衆国議会で採択するよう勧告」を出す決定をしていた。アダムズは、「平和の問題は条件の問題」と捉え、「科学的であるが外交的な機能を持たない国際専門家委員会を設置」し、「建設的な国際主義の精神に基づいて」継続的な調停を行うという当案に賛成し、「中立会議を直ちに招集することを、新しい綱領の第一の柱とした」と書いている⁴²⁾。

以上のような経緯から、WPPの綱領では、国際的な政府レベルでの会議や組織を形成、運営することにおけるアメリカ政府の役割が強調されたと考えられる。さらに、綱領では、武力ではなく経済制裁等が訴えられているが、同時に、戦争の経済的原因を取りのぞくことも要求されている。経済制裁でも経済支援でも20世紀のアメリカが大きな力を持ったことを考えると、WPPの指導者たちは、国際関係における経済的な制裁や支援の効果の大きさを念頭に置いていたのかもしれない。また、国際協調や法の支配の実現のために、アメリカを軍国主義に陥らせないこと、政治参加の機

会を男性だけでなく女性に与えること、平和教育を充実させることなど、アメリカ社会や政治の改革が訴えられている点も重要であった。

第4節 ハーグ国際女性会議とアメリカの女性たち

以上のように、社会改革運動で活動していた女性たちが主導する形で、アメリカではWPPが発展していった。そして、ヨーロッパでもアメリカでも平和運動への機運が高まる中、1915年4月、オランダのハーグで国際女性会議（International Congress of Women）が開催されることになった。ハーグの国際女性会議は、1904年に欧米の女性参政権運動家がベルリンに集まって結成した国際女性参政権同盟（International Women's Suffrage Alliance、以下、IWSA）傘下のヨーロッパ各国支部の有志の女性たちが中心となって企画したものだった。元々、女性参政権についての隔年会議が、1915年6月にベルリンで開かれることになっていたのだが、戦争勃発のためドイツでの開催が中止となった。しかし、ヨーロッパの女性参政権運動で活動してきた女性たちの一部は、各支部の女性たちの国境を超えた連帯を訴え、国際会議の開催を求めた。1915年2月に、外科医で全国オランダ女性参政権協会（Dutch National Society for Women's Suffrage）の会長のアレッタ・ヤコブス（Aletta Jacobs）を中心に、イギリス、ベルギー、ドイツ、オランダの女性たちの小委員会がアムステルダムで開かれ、中立国であったオランダのハーグで国際女性会議を開くことが決定された。彼女らは、国際女性会議の事前プログラムを計画し、また、中立国であったアメリカの女性たちの参加を要請し、議長もアメリカ人のアダムズに依頼したのである⁴³⁾。会議では、欧米の中立国及び交戦国から約1136名の代表の女性たちが集まって、「国際関係の重要な問題について」話し合った⁴⁴⁾。

代表者の内訳は、開催国のオランダからが最も多かったが、次に多かったのがアメリカの代表者たちで、約50名ほどであった。元々参加を予定し

ていた180名のイギリスの代表者たちは、交戦国であったイギリス政府の度重なる方針転換で、パスポートの取得や国境を越えるのに苦勞し、実際に参加できたのは、すでに出国しているか米国経由で参加した3名だけであった⁴⁵⁾。アメリカ代表の多くは、ドーヴァー付近で留めおかれたトラブルはあったものの、無事に参加できた。これらの女性たちの多くは、WPPのメンバーであり、また、社会改革運動や参政権運動で活動してきた人々であった⁴⁶⁾。このように戦時の状況、及び、中立国であるアメリカへの期待が、アメリカの女性たちが会議で活躍する機会を作り出した。会議では、ICWPPの設立が宣言され、WPPはそのアメリカ支部となった。こうして、WPPの指導層の女性たちを中心に、アメリカの女性たちがこの国際的な組織の中で大きな役割を果たしていくことになる⁴⁷⁾。

1915年4月28日、ハーグの国際女性会議の様子を知らせるアダムズの基調講演の内容が、インディアナポリススター紙に掲載されている⁴⁸⁾。記事では、連合国側、同盟国側に関係なく、戦争が女性の地位の悪化や女性への暴力を招いていること、また、その事実を「16カ国から選ばれた1,000人以上の代表者達」は理解し、共闘していると伝えられている。また、「国際会議では目立つ各国の国旗も、まったく見当たりません。すべての演説の基調は、現在の戦争の野蛮さに対する女性の反感と、殺戮を法律に置き換えるために働く決意である」と述べられていた⁴⁹⁾。

さらに、記事では米国の女性たちの活躍が披露され、ボストンのファニー・ファーン・アンドリュース (Fannie Fern Andrews, 1867-1950)⁵⁰⁾、アニー・モロイ (Annie Molloy, 1871-1921)⁵¹⁾、シカゴのグレース・アボット (Grace Abbott, 1878-1939)⁵²⁾、フローレンス・ホルブルック (Florence Holbrook, 1860-1932)⁵³⁾、ソフォニスバ・ブリキンリッジ (Sophonisba Breckinridge, 1866-1948)⁵⁴⁾が既に演説をしたことが伝えられた⁵⁵⁾。そして、3つの決議案が暫定的に採択されており、「最終的な決議では、戦争、特に女性に及ぼす影響に対す

る女性の抗議を明らかにし、より良い世界秩序を創るための女性の責任を強調し、国際問題の平和的解決と国際親善と平和の促進、学校と家庭における教育への女性の支援を誓い、外交政策の民主的統制を主張することになる」と報告されている⁵⁶⁾。これらの決議案は、WPPの決議で訴えられた内容と重なる部分が多かった。

ハーグでの宣言、すなわち、ICWPP第一回大会で採択された決議は、大まかに整理すれば、平和主義と国際協調のために、1) 女性の政治参加(参政権から外交に至るまで)、2) 調停や平和的手段での戦争の解決、3) 国際裁判所や国際議会などの国際的な機関の設置、4) それらの目標を達成するための、政治や外交の民主化や教育の充実に求めるものであった。それらに加えて、1) 戦時の女性保護、2) 会議終了後に各国政府への使節団を組むこと、3) 戦後すぐに、女性たちの国際会議を再び開催するという実践的な要求や計画も入っていた⁵⁷⁾。以上のような決議内容は、国際協調の尊重、武力以外の手段による平和実現、また、それらを実現するための女性の政治参加や、社会や政治の民主化を求めるという点で、WPPの綱領に共通する。

しかし、ICWPPの決議は、WPPの決議のみを下敷きにしたというわけではない。会議の様子を報告した*Women in the Hague*には、ウィスコンシン案で要求されている調停会議の設置について、参加者の間で情報共有があったことが記されている⁵⁸⁾。WPP発足時にはまだWPPには参加していなかったボルチも、1915年のハーグ国際女性会議に向かう船上で、この案についてのワークショップがあったことを記している⁵⁹⁾。また、ヨーロッパの準備委員会から事前に知らされた基本綱領が、アメリカの代表者たちに会議開催前に共有されていたことも記述されている。この基本綱領とは、「(a) 国際的な論争は、平和的手段によって解決されなければならない、(b) 議会参政権を女性に拡大すべきである」という主張であった⁶⁰⁾。これらの

ことから、WPP結成時に、継続的調停や女性の政治参加などの基本的な項目は、WPPを支えた女性たちやヨーロッパでハーグの国際女性会議を準備していた女性たちの間で既に共有されていたと言えよう。実は、ハーグでの国際女性会議でも、女性参政権の求め方について、意見の対立があった⁶¹⁾。しかし、平和実現のための方策として、女性参政権の主張は、中立国アメリカへの期待と革新主義的な改革思想と結びついて語られたと言えよう。

おわりに

以上のように、アメリカの女性平和運動でも、ICWPP設立までの国際女性平和運動でも、女性参政権の要求よりも、革新主義的な社会や政治の改革思想が明確に打ち出された。それは、社会改革運動、参政権運動の両方で革新主義的な改革思想が共有されていたからであった。また、女性参政権運動を進めてきた女性たちの間で、戦争という不安定な状況の中で、平和運動と明確に結びついた形で女性参政権を主張していくことに対して、参政権運動のあり方について対立や分裂があったことも影響した。参政権運動側の一部の女性たちは、平和を主張することで招きかねない、女性参政権自体への世論の激しい反発や偏見を懸念した。むしろ、革新主義思想を体現してきたと考えられるような社会改革運動のグループの方が、はっきりと平和運動への支持を打ち出せたと言える。こうして、アダムズなど社会改革運動で活躍してきた（または、世間でその印象が強い）女性たちが、女性平和組織の会長や議長等により適任だと考えられるに至った。さらに、移民に接し、多様な人々からなる社会で福祉などの社会活動（あるいは、研究や教育活動）をしてきたという経験が、社会改革運動に関わった女性たちの国際関係への関心を高め、また、彼女らの政治的な活動の妥当性を擁護する理由にもなったとも言える。

ハーグでの国際女性会議でのアダムズの基調講演では、アメリカの女性たちの活躍や彼女達の演説を称賛している部分もある⁶²⁾。そのアダムズという言葉からは、国際的な平和運動でのアメリカの女性たちの活躍への期待がうかがえる。同様にアメリカ人女性たちが果たす重要な役割は、ボルチによっても述べられている。たとえば、会議についての報告及び回想録である前述の *Women at the Hague* で、ボルチは、ICWPPの資金や働き手について、次のように書いている。

アムステルダムのカイザーズグラハト (Keizersgracht) 467番地にある新しい [ICWPP] 国際本部は、女性たちが各地で熱心に結成している組織の象徴に過ぎない。フランス（当初はこの運動についてかなりの誤解があった）、ドイツ、ハンガリー、イギリス、スカンジナビア諸国、ロシアなど、あらゆる国で「恒久平和のための国際女性委員会」の国内グループが結成されている。アメリカの事務局は、シカゴの女性平和党の全米本部である。

資金と働き手が必要であり、戦争に見舞われていないアメリカは、その分担以上のことをしなければならない。アメリカが負うべき負担は、大きなものでさえある。多くの代表——そのうち、アメリカからの代表者は全員が、旅費をすべて自分で支払い、大会の一般経費にも貢献したが、すでに行われた活動にはかなりの費用がかかっている。将来は、さらに大きな出資の可能性⁶³⁾がある。

ボルチは、ヨーロッパでの戦争を止め、平和を作り出すことにおいて、「アメリカが公正で継続的な和解を作り出す役割を果たすことができる」⁶⁴⁾とも述べていた。国際的な女性の平和運動の根底には、革新主義的な改革思想があった。その中で、アメリカが果たす役割が欧米の平和運動に関わ

る女性たちの中で共有されていたこと、また、アメリカの女性たちが、その運動の中でリーダーシップをとっていくことが期待されており、また、彼女たち自身もそれを意識していたと言えよう。

*本稿は、中央大学共同研究費（2017～2020年度、共同研究プロジェクト「19世紀から20世紀北米における移民をめぐる規制と移民コミュニティの変容」）及び日本学術振興会基盤研究（B）課題番号19H01332の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1) 常松洋「アメリカのヴィクトリアニズムと中産階級」（『史窓』、第58号、2001年）、159頁、<http://hdl.handle.net/11173/680>（2023年3月12日閲覧）
- 2) 栗原涼子「第一波フェミニズムをめぐる女性運動史」渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社、1997年、6-7頁。
- 3) 栗原、前掲書、1997年、6-7頁。
- 4) Noralee Frankel and Nancy S. Dye eds., *Gender, Class, Race, and Reform in the Progressive Era*, Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1991, pp. 1-3; Sara M. Evans, *Born for Liberty: A History of Women in America*, New York and London: Free Press and Collier Macmillan, 1989, p. 145; 一政（野村）史織「セツルメント運動の活動家エミリー・グリーン・ボルチと社会学—スラヴ移民像と同化における性役割分業」（『英語英米文学』、第58集、2018年）67-71頁；一政（野村）史織「19世紀末から20世紀初頭アメリカ合衆国における女子高等教育とソーシャルワーカー—エミリー・グリーン・ボルチの教育と活動を中心に」（『人文研紀要』第93号、2019年）、257-259頁；坂本辰朗『アメリカ教育史の中の女性たち—ジェンダー、高等教育、フェミニズム』東信堂、2002年、4-6頁；進藤久美『ジェンダー・ポリティックス—変革期アメリカの政治と女性』新評論、1997年、47頁；本間長世編『新しい女性像を求めて』、評論社、1977年、63-64頁；松本悠子「家庭・コミュニティ・国家—革新主義時代のジェンダー」有賀夏紀、小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー入門』、青木書店、2010年、119-138頁。
- 5) 栗原、前掲書、1997年、6-7頁。
- 6) 一政（野村）、前掲書、2018年、67-78頁；木原活信『福祉に生きる—ジェーン・アダムズ』大空社、1998年、99頁。

- 7) Emily Greene Balch, Jane Addams and Alice Hamilton, *Women at the Hague: The International Congress of Women and its Results*, New York: The Macmillan Company, 1915, pp. 108–109; Carrie A. Foster, *The Women and the Warriors: The U.S. Section of the Women's International League for Peace and Freedom, 1915–1946*, New York: Syracuse University Press, 1995, pp. 4, 10–13; Kristen E. Gwinn, *Emily Greene Balch: The Long Road to Internationalism*, Urbana, Chicago and Springfield: University of Illinois Press, 2010, p. 80; Linda K. Schott, *Reconstructing Women's Thoughts: the Women's International League for Peace and Freedom before World War II*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1997, pp. 38–46; 栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史』彩流社, 2018年, 27–65頁。
- 8) WILPF, “Our Herstory,” in Women's International League for Peace and Freedom, 2022, <https://www.wilpf.org> (Accessed on 1 February 2023).
- 9) Gwinn, *op. cit.*, pp. 108–124.
- 10) Foster, *op. cit.*, p. 14; WILPF, *op. cit.* (Accessed on 7 March 2023).
- 11) Gwinn, *op. cit.*, pp. 108–124.
- 12) Foster, *op. cit.*; Schott, *op. cit.*; 杉森長子『アメリカの女性平和運動史—1889年～1931年』ドメス出版, 1996年など。
- 13) Foster, *op. cit.*, pp. 5, 11.
- 14) Domenica M. Barbuto, *American Settlement Houses and Progressive Social Reform: An Encyclopedia of the American Settlement Movement*, Phoenix (AZ): The Oryx Press, 1999, p. 187; Foster, *op. cit.*, p. 5; Michael Friedman and Brett Friedman, *Settlement Houses: Improving the Social Welfare of America's Immigrants*, New York: The Rosen Publishing Group, 2006, pp. 12–17.
- 15) Jane Addams, *Peace and Bread in Time of War*, University of Illinois Press, 2002 [= 1922], p. 4.
- 16) Barbuto, *op. cit.*, pp. 37, 92–93, 224.
- 17) Addams, *op. cit.*, pp. 4–5.
- 18) Barbuto, *op. cit.*, pp. 17, 62–63, 186–187; Gwinn, *op. cit.*, pp. 30–33; Heather Marie Capitanio, “Denison House: Women's Use of Space in the Boston Settlement,” *Scholar Works at UMass Boston*, Boston: University of Massachusetts Boston, 2010, <https://scholarworks.umb.edu/> (accessed 27th March, 2019).
- 19) Barbuto, *op. cit.*, pp. 4–6, 87–89, 109–110.
- 20) 一政(野村), 前掲書, 2018年, 71頁。

- 21) Addams, *op. cit.*, pp. 4-5.
- 22) *Ibid.*, pp. 4-5.
- 23) *Ibid.*, p. 5.
- 24) Barbuto, *op.cit.*, pp. 17-18, 62-63; Gwinn, *op.cit.*, pp. 27-35; 一政 (野村), 前掲書, 2019年, 269-271頁。
- 25) Barbuto, *op.cit.*, pp. 17-18, 62-63; Gwinn, *op.cit.*, pp. 27-35; 一政 (野村), 前掲書, 2018年, 72-75頁; 一政 (野村), 前掲書, 2019年, 269-271頁。
- 26) Emily Greene Balch, *Our Slavic Fellow Citizens*, New York: Arno Press and the New York Times, 1969 [1910].
- 27) Barbuto, *op.cit.*, pp. 17-18, 62-63; Gwinn, *op.cit.*, pp. 27-35; 一政 (野村), 前掲書, 2018年, 72-75頁; 一政 (野村), 前掲書, 2019年, 269-271頁。
- 28) 一政 (野村) 史織 「20 世紀はじめの米国の社会改革運動と国際女性平和運動—エミリー・グリーン・ボルチの民族、国家、国際協調の思想を中心に」 (『アメリカ研究』第56号, 2022年), 162頁。
- 29) Balch, *op.cit.*, 10-27; 一政 (野村), 前掲書, 2018年, 81頁; 一政 (野村), 前掲書, 2022年, 161-165頁。
- 30) Foster, *op. cit.*, pp. 4, 10-13; Gwinn, *op. cit.*, p. 80; Schott, *op. cit.*, pp. 38-46; 栗原, 前掲書, 2018年, 27-65頁。
- 31) シュヴィマーは、オーストリア=ハンガリー帝国治下のブタベスト生まれ。本稿では以下ドイツ語読みでシュヴィマーと表記する。
The Editors of Encyclopaedia Britannica. “Rosika Schwimmer.” Encyclopaedia Britannica, September 7, 2022, <https://www.britannica.com/biography/Rosika-Schwimmer> (accessed on Sep 8 2022).
- 32) Addams, *op. cit.*, p. 6.
- 33) *Ibid.*, p. 6; Foster, *op. cit.*, pp. 10-11.
- 34) Addams, *op. cit.*, p. 6.
- 35) Foster, *op. cit.*, pp. 1-3, 11; Gwinn, *op. cit.*, pp. 76-77.
- 36) Foster, *op.cit.*, p. 11.
- 37) Addams, *op. cit.*, pp. 6-7.
- 38) *Ibid.*, p. 7.
- 39) 栗原, 前掲書, 1997年, 2 頁。
- 40) 一政 (野村), 前掲書, 2022年, 165頁。
- 41) Addams, *op.cit.*, pp. 6-7; Balch, Addams and Hamilton, *op. cit.*, 7.
- 42) Addams, *op. cit.*, pp. 6-7.
- 43) Foster, *op.cit.*, pp. 13-14.

- 44) Balch, Addams and Hamilton, *op.cit.*, p. 2; WILPF, *op.cit.*
- 45) Balch, Addams and Hamilton, *op.cit.*, pp. 6-7, 12-13.
- 46) *Ibid.*, pp. 3, 6-7; Foster, *op.cit.*, p. 14.
- 47) 一政（野村）, 前掲書, 2022年, 165頁。
- 48) Jane Addams, “Woman’s position in war worse than hellish, keynote of peace congress, writes Jane Addams”, *Indianapolis Star*, April 29, 1915, p. 1.
- 49) *Ibid.*
- 50) Britannica, The Editors of Encyclopaedia (most recently updated by Brian Duignan). “Fannie Fern Phillips Andrews” *Encyclopaedia Britannica*, January 19, 2023. <https://www.britannica.com/biography/Fannie-Fern-Phillips-Andrews> (Accessed on 3 March, 2023).
- 51) モロイについては、信頼のおける資料が見つからず、まだ調査中である。生没年については、wikipediaを参考にした。wikipediaの記載によれば、モロイは電話交換手であり、電話交換手組合のリーダーで、ボストンの労働運動や女性参政権運動で活動していたという。“Annie E. Molloy” in *Wikipedia*, n.d., https://en.wikipedia.org/wiki/Annie_E._Molloy (Accessed on 13 March, 2023).
- 52) Barbuto, *op.cit.*, pp. 2-3.
- 53) The New York Public Library, “Florence Holbrook scrapbooks” in *Archives and Manuscript*, The New York Public Library, 2023 <https://archives.nypl.org/mss/6292> (Accessed on 3 March, 2023).
- 54) Barbuto, *op.cit.*, pp. 35-37.
- 55) Addams, *op.cit.*, 1915, p. 1.
- 56) *Ibid.*
- 57) WILPF, “WILPF Resolutions, 1st Congress, The Hague, Netherlands 1915”, 2022, https://www.wilpf.org/wpcontent/uploads/2012/08/WILPF_triennial_congress_1915.pdf (Accessed on 1 March 2023).
- 58) 一政（野村）, 前掲書, 2022年, 165頁。
- 59) Balch, Addams and Hamilton, *op.cit.*, p.7.
- 60) *Ibid.*
- 61) *Ibid.*, p. 9.
- 62) Addams, *op.cit.*, 1915, p. 1.
- 63) Balch, Addams and Hamilton, *op.cit.*, pp. 107-108.
- 64) *Ibid.*, p. 111.

